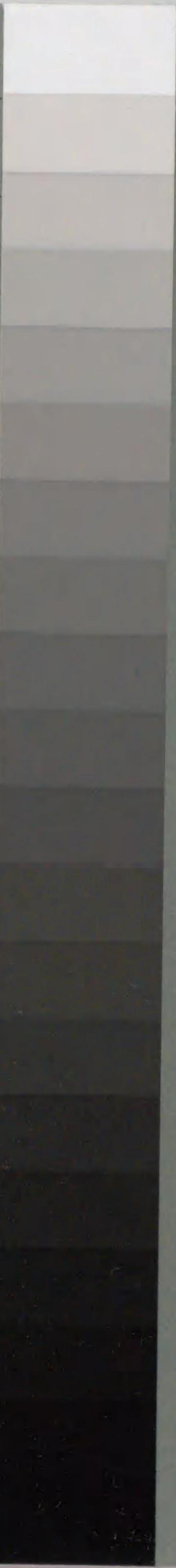


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



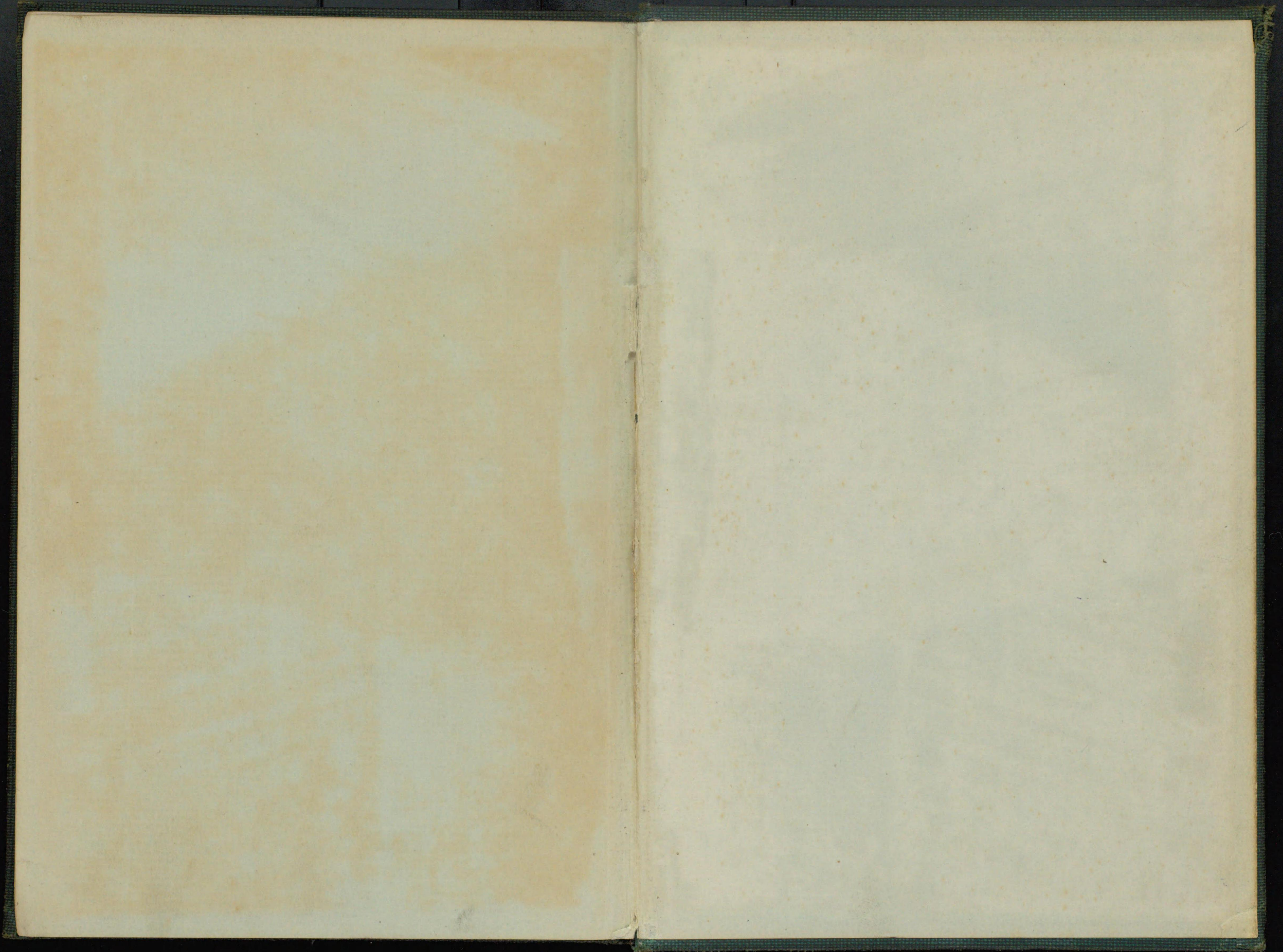
581  
06

581-206  
1200501522331



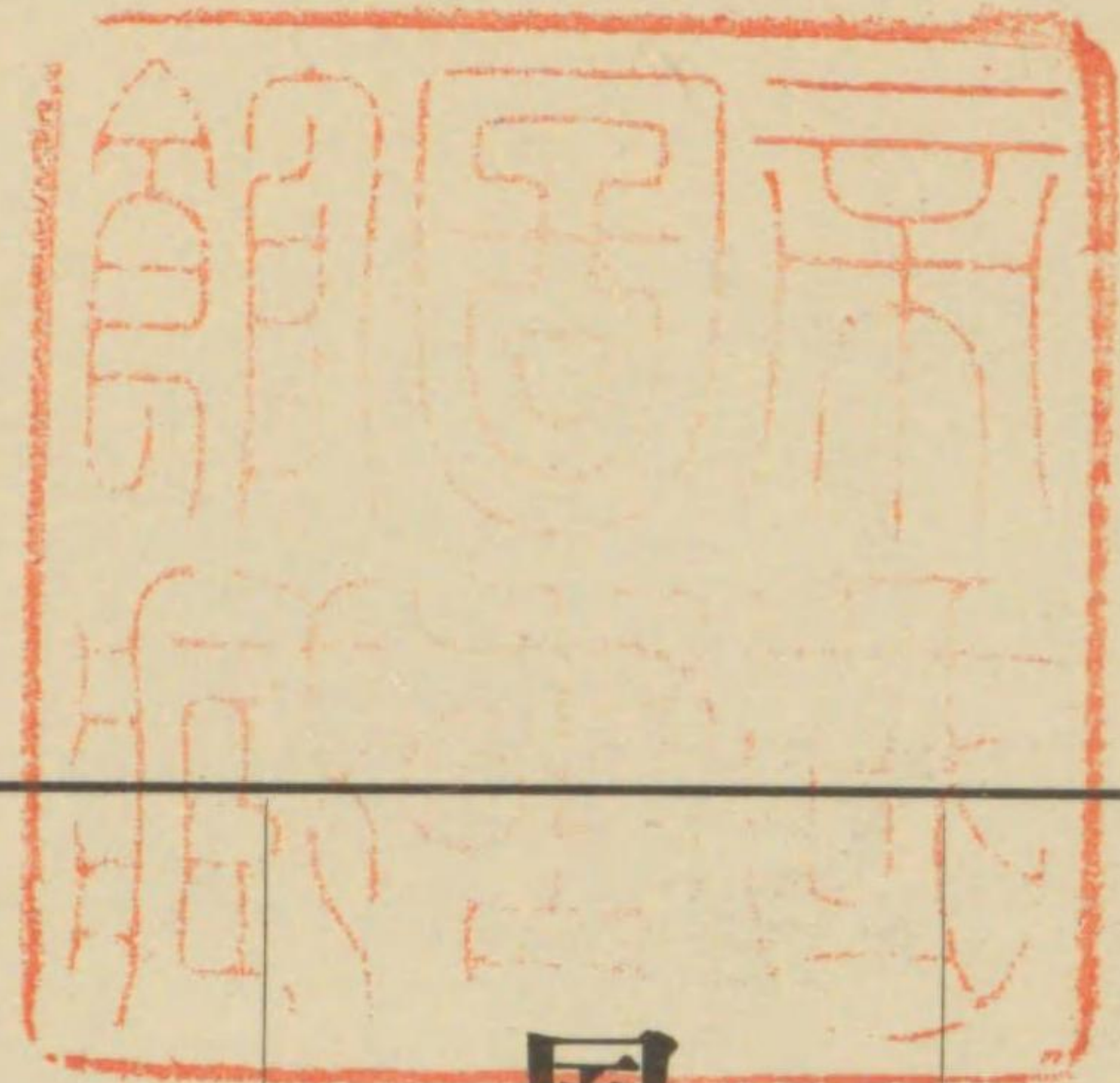
5







2/2W68



津田敬武著

鳳凰堂の研究

岡書院板





寫眞 國士淨の壁校壇彌須







寫横圖土淨の壁後壇彌須



581-206

51 11

### 序

この鳳凰堂の研究は昭和二年から三ヶ年間帝國學士院より研究費の補助を得て研究した「阿彌陀佛及淨土變相に關する圖像誌的研究」中の一小部分で、既に國華誌上に於て公にしたものを幾分増補加筆したものである。こゝに私は帝國學士院の奨勵と援助に對して深く感謝の意を表はす。

昭和五年六月二十一日

津田敬武



目次

第一章 序 説

- 一 鳳凰堂の由來……………三
- 二 鳳凰堂建立の動機……………四
- 三 鳳凰堂研究の價值……………六

第二章 鳳凰堂の構格とその和平諧調の美

- 一 概 説……………八
- 二 中殿の構造……………九
- 三 中殿歩廊及翼樓の外観美……………一〇

第三章 正覺相阿彌陀像と中殿内部の莊嚴美

- 一 中殿内部の莊嚴美……………一三
- 二 本尊正覺相阿彌陀像とその眞身觀……………一五
- 三 本尊胎内の甘露呪……………一七
- 四 雲中供養菩薩の律動美と虚空段の莊嚴美……………一九



第四章 中殿の扉及壁面に描かれたる觀經所説の圖相

- 一 概説……………三
- 二 正面の扉に描かれたる上品往生觀……………三
- 三 左側の扉及壁面に描かれたる中品往生觀……………六
- 四 右側の扉及壁面に描かれたる下品往生觀……………六
- 五 後面の扉に描かれたる日想觀……………三

第五章 須彌壇後壁の極樂淨土及修法儀式の圖

- 一 極樂淨土の圖……………三四
- 二 修法儀式の圖……………三九

第六章 結論

- 一 聖衆の俱會と往生觀……………四三
- 二 鳳凰堂に表象されたる淨土觀の總括的批判……………四七

圖版解説……………五三

鳳凰堂の研究



# 第一章 序 説

## 鳳凰堂の由來

平等院鳳凰堂は京都の南方約一六軒、山水明媚の郷宇治にあり、東面して建ち、周圍に池水をめぐらし、後に丘陵を負ひ、前方は宇治川の清流を距て、朝日山を望み、四圍風光の美に富んで居る。

宇治の地はもと清和陽成天皇の御世、左大臣源融が、その風水を愛し、別莊を建て、屢々清遊を試みた所である。その後、陽成院もこの地に行宮を建て給ひ、宇治院と稱し、傳へて一條院の時に至つたが、この時天皇これを左大臣源雅信に賜ひ、長徳四年雅信更にこれを關白藤原道長に譲つた。道長もまた大にこの地を愛し、常に往來したと傳へられて居る。道長の子頼通これを父より受け、後、革めて寺となし、平等院と稱した。要するに平等院の前身は藤原氏の別莊であつた。



のである。

藤原氏は久しく朝廷に勢力を得、諸國に莊園を置き、不輸租の土地を占有して歳入ます／＼豊富となり、その第宅の如きも宏大なる寢殿造を構ふるに至つた。寢殿造は正殿、對屋、渡殿、釣殿を設け、正殿の前に遣水を流し、池を掘りて中島を築き、中島の假山より瀧をおとし、大饗の時には池に龍頭、鶴首の船を浮べて樂を奏するを例とした。

然るにこの寢殿造も、都にありては豪奢を極めた貴族の心を長く満足せしむることが出来なくなり、彼等は山水の勝地を求めて別業を營むに至つたのである。左大臣源融の如きも、その一人で、東六條に川原院を建て、臺閣、水石華麗を盡し、嵯峨、宇治にも、山莊を營み豪奢を極めたのである。既に云ひし如く、平等院の前身は彼が宇治に築いた別業で、その阿彌陀堂として創建された鳳凰堂のプランは大體に於て寢殿造に似て居るのである。

## 二 鳳凰堂建立の動機

藤原頼通は父祖の餘威を承けて皇女を妻となし、遂に太政大臣にまで進み、その驕奢父に過ぎたと云ふ。晩年におよび父道長から譲り受けた宇治の別業を棄て、寺としたのであるが、如何なる動機からこれを寺としたのであらうか。この問題は當時貴族の間に流行した佛教觀を少しく考察するならば自から明らかになるであらう。平安時代の佛教は東密、台密の御祈禱宗教で、即ち儀式を主とした修法の宗教であつた。奈良朝の學究的佛教はすたれて、易行なる祕密佛教が流行したのである。現世の榮華を求めて得られざる所なき貴族は、この祕密佛教によつて來世の極樂往生を願ひ、寺塔を起し、修法を盛んにするの風を生じたのである。頼通が宇治の別業を寺となしたのも即ちこの風に化せられたものと見て誤りはないであらう。

さて頼通が宇治の別業を棄て、寺となしたのは永承七年三月二十八日のことであつた。その日彼は天台の僧侶を請じ法華三昧を修し、平等院と號したとある。法華三昧を修めることは、命終の時に神亂れず、直に安養に往生し、彌陀に面奉し、衆聖に値ひ、十地を修行して樂常を證せんがためであるから、彼がその別



業を寺となしたのは死後のために浄土を欣求したのであつたことが判る。

かくてその翌年即ち天喜元年、彼頼通は鳳凰堂を建築して阿彌陀如來の像を安置し、百口の高僧を屈請して供養したのであるが、その式は御齋會に准せられたと云ふ。<sup>(1)</sup>その當時、建築された平等院の諸堂は、鳳凰堂の外に、三重塔、五大堂、金堂、講堂、經藏、東西法華堂、大門等悉く具備して居たと傳へられて居るが、鳳凰堂以外の諸堂は今日その遺址も存して居ない。然し鳳凰堂即ち阿彌陀堂は、諸堂中最も大切なものであつた。

(1) 扶桑略記卷廿九。

(2) 同上。

### 三 鳳凰堂研究の價值

鳳凰堂は藤原時代の善美な建築、繪畫、彫刻、工藝など各種藝術の粹をあつめて、當時の浄土思想を表象せる大切な遺構である。その重要さは、飛鳥時代の法隆寺、江戸時代の日光東照宮と比較して勝るとも劣るものではない。然るに未だ

全體をまとめて研究したものがないのである。尤も建築、彫刻、繪畫、裝飾などの方面から部分的には紹介され、或は論評されたことはあるが、建築方面に於ける關野博士の研究<sup>(1)</sup>と裝飾方面に於ける武田氏の説を除いては徹底せる研究の乏しきを遺憾とするものである。よつて吾人はあらゆる方面から鳳凰堂を解剖してその各部に表象されて居る思想を綜合して鳳凰堂そのもの、真相を明らかにしたいと思ふ。蓋し鳳凰堂は阿彌陀佛の浄土に擬したもので、その周囲の風光林泉の美その建築美、内部の莊嚴美、扉及び壁面に描かれた觀經の説相圖など何れの部分に於ても藤原時代の日本化せる浄土思想を遺憾なく具體化して居る。即ち藤原時代の浄土觀より生れた社會相の一面を今日如實に見ることの出来る遺構で、この點に於て鳳凰堂の價值は唯一無二と云ふべきであらう。

(1) 鳳凰堂建築説、關野貞、建築雜誌百二號、明治二十八年。



## 第二章 鳳凰堂の構格とその和平 諧調の美

八

### 一 概 説

鳳凰堂は中殿、步廊、翼樓及び尾廊より成り、その全形は鳳凰の虚空より飛び下りた形態を象つたものと傳へて居る。(第四圖) 即ち中殿は中央にありて鳳凰の體軀を象り、步廊は中殿の左右に延び翼樓は步樓の末端にありて共に鳳凰の兩翼を象り、尾廊は中殿の後部にありて、鳳凰の尾を象つて居ると云ふのである。然しこれは後世附會された説で鳳凰堂の名は屋上に置かれた鳳凰から出たものでそのプランは大體に於て寢殿造の様式に倣つて居る。即ち鳳凰堂の中堂は寢殿に當り、左右の翼樓は東西の對屋たいのやに該當し、正面の蓮池は、寢殿の前の池に相當する。

### 二 中殿の構造

中殿は三間二面外觀は重層をなし、上層は入母屋造、下層は廂即ち裳層になつて居る。屋根は本瓦葺で、形狀極めて美はしく、緩かなる反を有し、屋上棟の左右兩端には、古色蒼然たる青銅製の鳳凰を戴せて居る。(第六圖) 高さ三尺二寸餘、重さ約十六貫、その形態活氣に満ち、風に従つて廻轉する仕掛がある。所々に金色残存し、嘗て金色の燦然として輝いて居たことが判る。軒には二重繁樺しげだらきを配し、枿組ますぐみは和様みてさき三手先を用ゐて居る。裳層の屋根は、正面中央柱間はしらまの部分だけが一段高くなつて居る。それが爲め、正面の扉を一段高く建てるために便なるのみならず、正面の軒に一大變化を與へ、その入口をして莊嚴優美ならしめて居る。内陣は徑尺八寸、高さ二十尺の大なる圓柱を以て屋根を承け、正面は中央及び左右の柱間に扉を建て、中央の扉は既に述べたやうに廂の高さに應じて兩脇の扉よりも高く且つ大である。次に兩側面の柱間は前方の一間に扉を建て、その奥の一間は内面を板壁となし上に壁畫が描かれて居る。後面は裳腰もこしの部分が中



殿の内部と通じ、その一部分をなして居る。後面裳腰の中央柱間には扉を建て、その左右兩脇及び内陣の兩側面に接續する柱間はすべて板壁になつて居るが、もとはこの各柱間の腰長押上には扉を建てたものと見え、各柱間内法長押の下面には兩端に圓孔があり、その中間に長方形の溝がある。これと相對して腰長押の上面にも三個所に圓孔と溝のあつた形跡がある。然し此等の孔は、最初のものと思はれぬ節もある。要するに後面の裳腰はかなり改造されて居るので、今日その原状を知ることとは出来ない。

さて後面の裳腰は中央の柱間を除きその左右は全部或は塞がれて居たかも知れないが、それにしても正面は悉く開かれ兩側も半ば明け放つことが出来、内外極めて明るく、その開かれた扉には婉麗精緻な觀經の説相圖が展開され、堂内の莊嚴美が加はりその中に金色の彌陀を拜する有様は今日これを想像するも誠に淨土さながらの思ひがするのである。

### 三 中殿歩廊及翼樓の外觀美

中殿の兩脇に歩廊と翼樓がある。歩廊は左右へ均勢に延び、その兩端は前面に折れて居る。上下兩層より成るも、上層は極めて低きが故に中殿の高きに對して謙遜從屬の關係を示し、下層の柱間はすべて明け放たれて明るい氣分を現はして居るのである。

翼樓は歩廊の前方に折れて居る折點にある寶形造ほうぎやうづくりの樓閣で一段高く聳え、歩廊の高さに變化を加へ、抑揚の美を發揮して居る。その下層は歩廊と同様床も張らず、明け放たれて流通無礙である。

中殿歩廊、翼樓の綜合によつて成立して居る全形態の優美典雅なるは何人も驚嘆する所である。

中殿は正面蓮池に臨み、巍然として石壇の上に建ち、軒深く緩かな勾配を流して居る屋根の形態は特に流麗な趣致に富んで居る。左右兩側は入母屋深く、大なる破風をかけて兩側の翼樓に對せしめ、各棟の屋根は大小高低その形狀を異にし、中殿の大なる屋根を中心として優雅な綜合美を發揮して居る。各建築物上層の腰に廻らした勾欄附の廻椽はその形狀優美にして屋根の重みを承けて



直立せる柱に對し、輕快と休息の感を與へて居る。その他各部の構造及び相互の關係を見るに一點の非難すべき所もないやうに思はれる。即ち鳳凰堂の外觀に現はされた和平諧調の美はその昔極樂淨土を目のあたりに仰ぎもとめた人の心の美はしさを物語るもので今尙人の心に美はしき感じを與へて居るのである。

### 第三章 正覺相阿彌陀像と中殿内部の莊嚴美

#### 一 中殿内部の莊嚴美

中殿の内部は後面裳腰の部分と通じて居るため三間三面の方形をなし、床は板張で中央の一間ひとまに須彌壇を設け、その上に本尊阿彌陀如來の坐像を安置して居る。須彌壇は平塵へいじんと稱する金粉を散らした漆塗地の上に螺鈿を以て寶相花ほうさうげ文を嵌装したものであつたが、今は悉く剝離して蟲喰ひのあとの如くなつて居る。然しそのはじめ、金粉を混へた漆塗に填装された螺鈿模様の白く輝いたその美觀は、蓋し中尊阿彌陀如來の坐し給ふべき七寶莊嚴の中臺として誠にふさはしきものであつたであらう。

内陣四面長押上の小壁こかべには五十二軀の菩薩及び天人の雲上に歌舞音曲を奏して本尊阿彌陀佛を供養せる様が木造彫刻によつて現はされて居る。



天井は折上組入天井で寶相花模様を描き、その支輪の曲線は頗る好妙に出来て居る。須彌壇の後壁には極樂淨土及び修法儀式を現はした壁畫があり、正面左右兩側及び後面に建てられた各扉の内面及び内陣兩側の壁面には觀經所説の往生觀及び十三觀の一部を美はしく描き現はしたあとが残つて居る。

柱、貫、長押、天井、化粧種、種間、桝組、虹梁、須彌壇、天蓋などには藤原時代の代表的模様が應用されて居る。その模様の種類は、寶相花、寶相花葉、寶相華葉群、蝶、花菱、迦陵頻伽、圓點、蓮華、鳳凰などでこれを現はすに髹漆、螺鈿、金箔、透彫、金屬象眼を用ゐ、幾何學的模様に配するに自在畫的模様に以てし、その手法巧妙を極めて居る。即ち柱の如きも寶相花唐草の中に佛像或は伽陵頻伽の飛ぶ所を描き種々の如きは直線的模様中點々又は植物の模様群を混じたる如きその適用の法極めて宜しきを得、何れの部分を見るも流麗高雅な氣韻に溢れて居る。<sup>(1)</sup>

要するにその莊嚴は藤原時代の最も發達せる裝飾を應用したもので、中尊阿彌陀如來及びその他諸菩薩天人の相好はこの裝飾、美と相俟つて當時の淨土觀を具體化して餘す所がない。蓋し諸佛とその莊嚴美との關係は即ちこの鳳凰

堂の全體的價値をなすものである。

(1) 平等院の裝飾模様に就きて、武田五一(史學研究會講演集第一回)

## 二 本尊正覺相阿彌陀像とその眞身觀

本尊阿彌陀如來の像は中殿の中央須彌壇の上の臺座に安置されて居る。寄木造で金箔を施し、近年修理の結果、全面新しく金色に輝いて居る。高さ九尺七寸所謂丈六結跏趺坐の像である。面貌豐滿螺髮の刻みも細やかで、表面なだらかに衣の襞積を現はした線も甚しく隆起せず、優婉流麗の曲線を使用して兩肩を覆ひ、胸をひらき、膝をめぐつて居る。兩手は膝の上に集めて彌陀の定印を結んで居る。即ち左右空風二指の指端を接觸せしめて圓輪を作り、前面に兩輪を並べて靜思の表情を現はして居る。この印相はガンダラ彫刻に於て正覺の釋尊を現はした形像にも見る所であるからその起原は釋迦像にあると云ひ得るのである。面貌は扉繪の阿彌陀像と比較して溫容優美の點に甚だ劣れるは後世補作されたためであらう。これがため他の部分と稍々調和をかける恨



みはあるが當初の形相は蓋し彌陀の絶對的慈悲相を表象するに十分であつたであらう。(第七圖) この外本尊の左右には觀音勢至兩菩薩の立像のあつたことは當然であるが、今は全く失はれて居るのである。

本尊の坐せる臺座は數重の高きに達し、その上部の蓮座は豊麗なる蓮瓣を用ゐて蓮華の開花せる有様を現はし、その上に彌陀の靈像を受け、その下の花盤、請花など一として佳ならざるなく、華文を刻鏤して富麗な裝飾を施して居る。

本尊の光背は二重光にして周圍には精緻な飛天散雲の透彫がある。その散雲は香煙の如く渦を卷いて降るが如く、昇るが如く見える。その瑞雲中に十二の天人が嵌装されて居るが、何れも音樂を奏して本尊を供養すると共に、淨土を謳歌し、本尊の絶對的慈悲より生ずる活動美を展開せるもの、如くである。

本尊の上部には方形の天蓋がかゝつて居る。その天井は本堂の天井と同様に折上げ格天井で周圍に垂飾を有し、中央に圓蓋をつるして本尊の頭上を覆うて居る。その格天井の格縁がうらには螺鈿を嵌入し、格間がうまには所々に圓鏡を嵌装して居る。懸垂せる圓蓋は中央に蓮華を現はし、その周圍に寶相花の透彫がある。

全面に漆箔を貼し、優美にして精緻を極めて居る。垂飾も寶相花の透彫で、同じく精巧を極め、尙この垂飾には寶玉で造られた瓔珞の殘缺が附着し、嘗て寶玉の瓔珞をめぐらした名残をとめて居るのである。天蓋に施されたこの精緻な彫刻は、木彫透彫の極致にまで達せるものと云ひ得るであらう。(第八圖) その繊細優美な曲線に施された漆箔より發する金色の光は所々に嵌装された螺鈿及び鏡面より發する白銀色の光明と相映發し、これに加ふるに微風にゆらぐ瓔珞より發する寶玉の種々なる光明は、互に相合して本尊の絶對的靜寂を表象せる金色に統一され、禮拜者の心に云ふべからざる莊嚴美の印象を與へたであらう。即ち觀經に説く所の阿彌陀如來の眞身觀を具體化して一念三千の妙法を説くとも云ひ得るであらう。

### 三 本尊胎内の甘露呪

本尊の胎内には阿彌陀の大呪が納められて居る。その大呪即ち陀羅尼は第九圖に示す如く華麗優美な蓮座に取り付けられた圓盤しつたんに悉曇じつたん(梵字)で墨書され



て居る。この大呪の意義は、歸命三寶、敬禮聖無量光如來、應供正等覺、所謂三身甘露、甘露發生、甘露生、甘露藏、甘露成就、甘露威光、甘露神變、甘露騰躍、甘露等虛空作、甘露好音、一切義利成就、一切業煩惱盡滅成就となるのであるが、この呪中に甘露なる語が十返繰り返されて居るので十甘露の呪とも云ふ。甘露は梵語 *Amrita* の譯でもと吠陀<sup>ヴェダ</sup>に出で、諸神の飲料にして美味愉ふるにもなく一度味はゞ死することなしと云ふ不滅の力を意味して居る。尙この陀羅尼のことは源氏物語や枕草紙にも出て居るが、その功德に就ては、京都醍醐寺藏の藤原時代に作られた圖像抄第二卷に次の如く記載されて居る。

此陀羅尼讀誦一遍、則滅身中十惡、四重五無間罪一切業障悉皆消滅、若苾芘々々尼犯根本罪、誦七遍已、即時還得戒品清淨滿、一萬遍獲得不廢忘菩提心三摩地、菩提心顯現身中皎潔圓明如淨月、臨命終時、見無量壽如來與无量俱照菩薩衆圍繞來迎、安慰行者、則生極樂世界、上品上生證菩薩位、

即ちこの陀羅尼を讀誦する功德により如何なる罪障も消滅し、命終の時に臨んで阿彌陀如來を見、極樂世界に於て上品上生の菩薩位に生れると云ふのである。

から、この點から考へても頼通が鳳凰堂を建てた動機は、その時代の信仰に化せられて極樂往生の大願を起したためであることが明らかに知られるのである。

#### 四 雲中供養菩薩の律動美と虚空段の莊嚴美

中殿内部の四周、長押上の小壁に菩薩の像が五十餘軀取り付けられて居る。何れも雲上にありて、或は立つて舞ひ、或は坐して音樂を奏し、中央の阿彌陀如來を供養して居るのである。(第一〇圖)その姿態の自由にして變化に富み、極めて繪畫的氣分に滿ち、嘗ては美はしく彩色されたものと見え、金箔及び胡粉彩色のあとが所々に殘存して居る。こゝにその一軀を取り出して見るに、片足に軽く浮雲を踏んで立ち、左腕は長く伸ばして天衣の一端を取り、右手には撥を持ち、肘の所で上に曲げ、體の調子をと、中心をはづさず、上體は裸かのまゝで、天衣をまとい、天衣の兩端を長く垂れて居る。(第一一圖)その天衣の垂れは、左右の身側に沿うて長く垂れて居るから、肉體の傾斜に安全なる感を與へて居る。面貌は豊満優美にして微笑を湛へ、その立ち舞ふ姿は、恰も淑女の如くである。首部は圓



光につゝまるゝも人生とかけ離れた光明の輝きとも見え、足下に踏む雲形にも超自然的な感じは起らない。唯美の曲線を描いて静かに舞ふ有様は、浮世そのまゝで厭世的な何物もない。他の何れの菩薩をとつて見るも一として同形なるものはないが、その婉麗な態度に於ては即ち一である。此等諸菩薩のかゝれる壁面は、一帯白堊で塗り替へられて居るが、もとは彩雲樂器などの飛行せる有様を描いたものと見え、今尙壁面の貫なきに彩雲の部分が残存して居る。即ち此等婉麗自在な供養の諸像は、かくの如き背景と相俟つて内陣の四周に虚空の莊嚴を現はしたもので、その當時の美觀は蓋し想像も及ばぬことである。

## 第四章

### 中殿の扉及壁面に描かれたる 觀經所説の圖相

#### 一 概 説

中殿の扉と壁面には既に述べたやうに觀經の説相圖が描かれて居る。即ち正面の扉には上品の往生觀を描き向つて右側の扉と壁面には中品の往生觀、左側の扉と壁面には下品の往生觀、後面の扉には日想觀が描かれて居る。

その畫は構圖雄大、筆致優美にしてその色彩及び一々の描線にも日本畫の趣致を發揮し、穩かなる山水の景を取り入れ、自然の美を背景として彌陀の來迎が描かれて居る。當麻曼荼羅の圖は支那風を脱せざるが、この觀經の説相圖に於ては藤原式の豊滿婉麗な特徴を自由に發揮して日本化された彌陀の來迎觀を遺憾なく表象して居るのである。



## 二 正面の扉に描かれたる上品往生觀

上品往生觀の圖は中殿正面の各柱間に建てられた扉に描かれ、上品上生觀の圖は中央の柱間に建てられた二枚の扉に現はされて居る。外から向つて左の扉の下半は悉く剝落し、上半は緑及び黄色の胡粉が残存して居るが圖柄は少しも判らない。唯上部に色紙形をつくり、觀經に説かれた上品上生觀の文が次の如く墨書されて居る。括弧内の文は觀經によつて補つたのである。(以下これに同じ)

上品上生者。若有衆生願生彼國者。發三種心。即便往生。何等爲三。一者至誠心。二者深心。三者廻向發願心。具三心者。必生彼國。復有三種衆生。當得往生。何等爲三。一者慈心不殺。具諸戒行。二者諸誦大乘方等經典。三者修行六念。廻向發願願生彼國。具此功德。一日乃至七日。即時得往生。(生彼國時。此人精進勇猛故。阿彌陀如來。與觀世音大勢至。無數化佛。百千比丘。聲聞大衆。無量諸天。七寶宮殿。觀世音菩薩。執金剛臺。與大勢至菩薩。至行者前。阿彌陀佛。放大光明。照行者身。與諸菩薩。授手迎接。觀

世音大勢至與無數菩薩讚歎行者勸進其心)

向つて右の扉も下半分は左と同様全く剝落して居る。上半も甚しく剝落はして居るが、青緑の山岳樹木などが見られ、山麓から諸菩薩を従へた阿彌陀如來の白雲に乗つて來迎せる有様が描かれて居る。然し近寄つて見るとその圖は近世補筆されたものであることが容易に觀破される。即ちそれは新たに胡粉を塗つてその上に書き起して彩色したものと見え、胡粉がよく固著しないため既に甚しく剝落して居る。その描線彩色も甚だ拙で、衣服の模様なども胡粉置き上げ彩色で全く徳川時代の手法である。然しその構圖は原畫によつたものと思はれる。

上品中生の來迎圖は正面より向つて右脇の柱間に建てた二枚の扉に描かれて居る。その一枚の扉には全面に連山と樹木の描かれたあとが残り、上部には觀經の文が次の如く墨書されて居る。

上品中生者。不必受持讀誦方等經典。善解義趣。於第一義心不驚動。深信因果。不謗大乘。以此功德。廻向願求生極樂國。行此行者。命欲終時。阿彌陀佛與觀世音大勢至、



無量大衆(眷屬)圍繞、侍紫金臺至行者前讚(言法子、汝)行大乘解第一義、是故我今來迎接汝

この扉の中部には來迎の圖が頗るよく残つて居る。即ち山峽から彌陀と諸菩薩が浮雲に駕して來迎して居る。阿彌陀如來は結跏趺坐の像で光背の一部及び光明を存し、その光背は下方に描かれた行者の家に達して居る。阿彌陀如來に扈從せる菩薩の數は凡そ二十體程認められる。そのうちには合掌し、和琴をひき、琵琶を弾じ、或は鉦を打つ菩薩がある。(第一二圖)その筆致は纖細流麗で殊に面貌の豐滿婉麗にして服飾の優美なるは、よく藤原時代の特徵と趣味を表現して餘す所がない。それ等の菩薩のうち彌陀の右方、扉の縁に接して描かれた菩薩の服飾に於て特にその華麗優美な彩色のあとが見られる。即ちその彩色は群青、綠青、紫、朱、切箔などが残り殊にその朱色は今尙鮮紅を保ち金箔もまた輝いて居る。その描法は先づ板面に薄く胡粉を施して地板に固著せる素地を作り、その上は薄く輪廓を施した後更に書き起して彩色を加へたものと思はれる。然し他の扉に描かれた彌陀の輪廓には板面に直接薄墨で描き、その上に胡

粉を施して再び書き起したのものもある。

上品下生の來迎圖は向つて左の柱間に建てられた二枚の扉に描かれ、その一枚には全面に青綠の山水のみを現はし、他の一枚には觀經の文と來迎圖が描かれて居る。觀經の文は上部にありて次の如く墨書されて居る。

上品下生者亦信因果不謗不乘、但發無上道心、以此功德、(廻向)願求生極樂國、行者命欲終時、阿彌陀佛、及觀世音大勢至、與諸眷屬、持紫金蓮華、化佛五百佛來迎此人、五百化佛、一時授手讚言諸子、汝今清淨、發無上道心、我來迎汝、

この經文の下部には青綠の山嶺連り、その山嶺の頂に近く阿彌陀如來及び扈從の諸菩薩は何れも小さく現はされ、皆後向きになり天の彼方をさして昇りつつある所が描かれて居る。彌陀の後方には金色の大なる未敷蓮華みふれんげ蕾の蓮華れんげが現はされて居る。これは即ち往生者のひめ込まれて居る蓮華である。諸菩薩はこの蓮華を取りかこんで合掌し、或は音樂を奏しつゝ、彌陀に従つて居る。菩薩の前方は一面に流水が描かれ、虚空から蓮瓣が降下して居る。この流水は恐らく淨土の八功德水を湛へた蓮池を表象せるものであらう。山の中腹には單



層瓦葺の殿舎がある。要するにこの圖は阿彌陀佛が往生者をこの殿舎から迎へて淨土に歸り給ふ所を示したものである。

二六

### 三 左側の扉及壁面に描かれたる中品往生觀

中品往生觀の圖は中殿の左側の扉と壁面に描かれて居る。その中品上生觀の圖は最初の柱間に建てられた二枚の扉に描かれ、彌陀の來迎圖は外から向つて右の扉にあり、その上部には觀經の文が次の如く墨書されて居る。

中品上生者、若有受持五戒時八齋或修行諸戒不造五逆無過惡、以此善根、廻向願求生於西方極樂世界、臨命終時阿彌陀佛、與諸比丘眷屬圍繞、放金色光至其人、所演說苦空無常無我、讚歎出家得離衆苦、行者見已、心大歡喜、自見己身、坐蓮華臺、長跪合掌爲佛作禮。

この經文の下方に山嶺を描き山麓に來迎の阿彌陀如來を現はし、彌陀の前方には觀音勢至の兩菩薩が行者のある家の軒に近く來迎して行者を迎へんとして居る。彌陀の前後には菩薩が約十六人居り、その多くは合掌して居るが、他の菩

薩の印相は明らかでない。尚行者の居る家の後方の山峽には流水と四頭の馬が描かれて居る。その筆致遒勁にして山中に牧馬の景を取り入れたるは頗る人の意表に出づるものがある。これと相對する扉には他の場合と同様山嶺と人家を描けるのみである。

この入口から奥へ續く柱間内部の壁面には中品中生の來迎佛が描かれて居る。その手法は扉のそれとは稍異り、板面に先づ薄布を張り、その上にさび(漆下地)を塗つて上に漆を施し、更に胡粉を塗り白色の素地を作り、その上に畫圖を描き彩色を加へて居る。經文は向つて左の上部に墨書されて居るが、剝落して不明な文字が多い。經文のある部分から右方へ長く海水を描き、その下方に山嶺及び來迎の阿彌陀如來及び諸菩薩を現はして居る。阿彌陀如來は形大にして相好圓滿端嚴な坐像で、右手を胸前に持し、掌を外に向けて居る。白毫からは光明を發し、下方にある行者の家を照らして居る。(第一三圖) 阿彌陀如來の前方には、觀音勢至の兩菩薩が片膝をついて居る。觀音菩薩は兩手を以て蓮臺を持ち、面貌は藤原時代に於ける代表的美人の相を有し、やゝ首を傾け、姿態の婉麗優美



なるはこの菩薩のみを取り出して見るも美人畫として人を魅するに足るべきものがある。(第一四圖)その他の諸菩薩は例の如く何れも樂を奏し或は合掌して彌陀に従つて居る。

中品下生觀の圖は果して何處に描かれてあつたか不明で、全然最初から無かつたとも思はれない。後に述ぶるやうに或は須彌壇後壁の外面に下品下生の圖と接して描かれてあつたのかも知れない。

#### 四 右側の扉及壁面に描かれた下品往生觀

下品往生觀の圖は中殿の右側の扉と壁面に描かれて居る。下品上生觀の圖は最初の柱間に建てられた二枚の扉に描かれて、その一枚には全面に青緑の水のみを描き、山麓には流水家屋屏垣などの描かれたあとを存して居る。他の一枚には彌陀來迎圖とその上部に觀經の文が次の如く墨書されて居る。

下品上生者、或有衆生、作衆惡業、雖不誹方等經典、如此愚人、多造衆惡法、無有慙愧、命欲終時、遇善知識、爲說大乘十二部經首題名字、以聞如此諸經名故、除却欲千劫

極重惡業、智者復教合掌叉手、稱南無阿彌陀佛、稱佛名故、除五十億劫生死之罪、爾時彼佛、卽遣化佛一化觀世音、化大勢至、至行者前讚言。善男子、以汝稱佛名故、諸罪消滅、我來迎汝、作是語已、行者卽見化佛光明、徧滿其室、見已歡喜、卽便命終、乘寶蓮華、隨彼佛後生寶池中。

この經文の下方に連山を描き、山麓に來迎佛を描いて居る。阿彌陀如來は結跏趺坐の像で、右手は胸前にあげ、來迎の印を結び、左手は垂れて掌を外に向け、白毫より光明を放ち、下方に描かれた屋内の病者を照らして居る。阿彌陀如來の前方には觀音菩薩が蓮臺を捧げ、そのあとに勢至菩薩が合掌して従つて居る。この外十六七人の菩薩が従つて居るが、何れも例の如く樂を奏し或は合掌して居る。屋内にありて彌陀の光明に照らされて居る病者は、烏帽子を冠り、合掌し、仰向けに臥し、其枕頭には僧侶と女房が居り、僧侶は經卷を持ち、頰杖を突いて居る。下品中生の來迎佛の圖は奥へつゞく次の柱間の壁面に描かれ、上部の色紙形の中には又例の如く觀經の文が墨書されて居る。

下品中生者、或有衆生、毀犯五戒八戒及具足戒、如此愚人、偷僧祇物、盜現前僧物、不



淨說法、無有慚愧、以諸惡業而自莊嚴、如此罪人、以惡業故、應墮地獄、命欲終時、地獄（衆火一時俱至、遇善）知識以大慈悲、卽爲讚說阿彌陀佛十力、威德廣讚、彼佛光明神力、亦讚戒定慧、解脫解脫、知見此人、聞已、除八十億劫生死之罪、地獄猛火、化爲清涼風、吹諸天華、華土皆有化佛菩薩迎接此人。

この經文の下方に多くの菩薩を從へて來迎せる阿彌陀佛が描かれて居る。その有様は反對側の壁面に描かれた中品中生の來迎圖とほゞ同一である。第一六圖）この外所々に山容を描いた圖の一部が残つて居る。

下品下生觀の圖は須彌壇後壁の外面卽ち中殿背面入口突當りの壁面に描かれたものと見え、觀經下品下生觀の經文が切れ切れに残つて居る。その文字は僅かに「不善業五、人以惡苦、彼能念者」の十一字でこれを觀經の經文中に挿入すると次の如くなる。

下品下生者、或有衆生、作不善業。五逆十惡、具諸不善、如此愚人、以惡業故、應墮惡道、經歷多劫、受苦無窮、如此愚人、臨命終時、遇善知識、種々安慰、爲說妙法、教令念佛、彼人苦逼、不遑念佛、善友告言、汝苦不能念、彼佛者、應稱無量壽佛、如是至心、令聲不絕

具足十念、稱南無阿彌陀佛、稱佛名故、於念念中、除八十億劫生死之罪、命終之時、見金蓮華、猶如日輪、住其人前、如一念頃、卽得往生極樂世界。

さて右の文中の十一字は辛うじて残れる白色胡粉地の上に殘存して居るのである。この外には一菩薩の首部が微かに認められるのみで、全面は黒く漆地のみになつて居る。然しながらこの文字の殘存によつて下品下生觀の圖のあつたことは明らかである。尤も全面に下品下生觀のみを描いたかどうかは不明で、既に一言したやうに今は全くその跡の不明な中品下生の圖も或はこゝに合せ描いたのではないかとも想像されるのである。

### 五 後面の扉に描かれたる日想觀

後面中央の柱間に建つて居る扉の畫圖も剝落甚しく、その圖様を判斷するこゝとは極めて困難である。内部から外に向つて右の一枚には山嶺、家屋、樹木、水などの圖が僅かに残り、左の扉には全部に海水を描いたあとあるのみである。彌陀の來迎を描いた形跡もなく、その墨書の文は次に示すやうに、日想觀の文が認



められて居るのである。

凡作想者一切衆生自非生盲有目之徒皆見日沒當起想念正坐西向諦觀於日令  
心堅住專想不移見日欲沒狀如懸鼓既已閉目開目皆令明了是爲日想  
即ちこの扉の圖は九品往生觀の一部をなすものではなく、觀經十三觀の最初の  
日想觀を描いて十三觀を代表せしめたものであらう。

日想觀の圖は當麻曼荼羅を見ると日の沒せんとする時丘上より西方に向ひ  
海上にかゝれる太陽を韋提希夫人の觀想して居る所が描かれて居る。この扉  
に描かれた日想觀の構圖も恐らくこれに似たものであつたであらう。即ち現  
にかすかながら山嶺家屋樹木及び流水の見られるのはこの種の圖の殘影であ  
らう。而して今は見られないが、日想觀を凝せる韋提希夫人はこの扉には如何  
なる姿に描かれて居たであらうか。恐らく日本人の姿に描かれて居たであら  
うに今それを見得ざるは遺憾である。

さてこの日想觀の圖を西方に當る後面の扉に描いたのは觀經の所說に従つ  
たもので、鳳凰堂の方位を伽藍南面の常軌に従はず東西に向けたこと、重大な

關係があるであらう。



## 第五章 須彌壇後壁の極樂淨土及 修法儀式の圖

### 一 極樂淨土の圖

須彌壇の後壁は全面に壁畫のあつたあとを存して居るが甚しく剝落して全圖を明らかにすることは出来ない。然しながら残存せる部分によつて、その圖の主要部は極樂淨土と修法儀式を現はしたものであることが知られる。

その極樂淨土の圖は一見して鳳凰堂の縮圖を見るが如き觀がある。(第一七圖) 即ち淨土の樓閣は蓮池にめぐらされた洲濱形の地上に建ち、中殿、歩廊、翼樓を備へ中殿の前面には須彌壇を現はし、壇上には阿彌陀三尊及び諸菩薩を現はして居る。須彌壇の前面に接して舞臺があり、舞臺の上には四人の菩薩が立つて舞踏を演じて居る。舞臺より左右の翼樓へは橋を架し、翼樓の内外には、菩薩が音

樂を奏して舞踏に和し、尙佛殿の上方の虚空には天人及び樂器が飛行し、蓮瓣が天より降下せる有様が描かれて居る。その構圖は當麻曼荼羅の内陣及び金戒光明寺山越阿彌陀像に附屬せる淨土圖にもよく類似せるのみならず、既に云ひし如く鳳凰堂そのもの、遺構とも極めてよく似て居るのである。従つてその圖は鳳凰堂のありし昔の有様を圖示せるものとして貴重な價值を持つて居る。故にその圖の各部について更に詳細な説明を要するのである。

中殿は重層入母屋造で、棟に金色の鴟尾を置き、柱、檼、榑組など外部に現はれた所はすべて朱塗で上層の腰まはりには、黒色の勾欄をめぐらして居る。左右兩方へ凡そ五間一面の歩廊を出し、その兩端には重層入母屋造の樓閣がある。その屋上は同じく金色の鴟尾を有し、柱も朱塗で上層の腰に勾欄を繞らして居る。この翼樓から前方へ短い歩廊を出し、その末端には、更に小なる重層寶形造の樓閣がある。この樓閣も上層に勾欄を繞らして居る。柱、榑組、檼などは、中殿と同様朱塗で階下の柱間はすべて明け放たれて居る。かくの如くこゝに描かれた



中殿の構造及びその外部の裝飾は大體に於て鳳凰堂のそれと同様である。

中央殿の前面には須彌壇があり、その形は鳳凰堂須彌壇のそれに似て周圍に黒塗の優美な勾欄をめぐらし、その床には華麗な敷物を敷き中央に阿彌陀如來の坐像がある。その像は、今は剝落して容易に認め難いが、二十餘年前の摸寫圖によつて明らかに見ることが出来る。(卷頭圖) 即ちその佛體の輪廓は纖細な朱線を以て現はし、正面を向き右手に說法の印を結べる像で、赤色の袈裟を兩肩にかけて居る。背後には金色に輝く二重の光背を有し、上部には天蓋がある。その天蓋の周圍は蓮瓣を以て飾られて居る。阿彌陀如來の左右には觀音と勢至の二菩薩が控へて居る。兩者とも坐像で稍中尊の方を向き脇侍にふさはしき姿勢をとり、一手を膝の上に下し、一手を胸前にかゝげて居る。その面貌は何れも豐滿優美にして引目式ひきめの目の上に、蛾眉を描き、上身は肉體を露出し、その上に珠玉で作られた胸飾をつけ、腰部以下は花形の織文を有する裳をまとひ、後には金色の二重光背を負ひ、その容貌姿態の溫雅にして、優美なるは、よく藤原時代貴族の理想に叶つて居る。この外阿彌陀如來の周圍には四五の菩薩が或は合

掌し或は華皿をさゝげて供養して居る。その姿態表情の優美なるは何れも觀音勢至に劣る所はない。これら須彌壇上の諸尊は中央尊を最も大に、これに次で左右の觀音勢至の像を大きく、その他の諸像は更に小さく現はし、その大小配置の形式及び莊嚴の有様は當麻曼荼羅内陣の中央及び金戒光明寺の山越阿彌陀佛に附隨して描かれた淨土圖中央の諸尊と同様で、それが同一の系統に屬して居ることは一見して明瞭である。それらの圖が何れも須彌壇を佛殿の外へ持ち出して現はして居るのは本尊及び諸尊の圖像を明らかに拜せしむるためになされた畫圖の上の巧風であることに注意を要するのである。

この須彌壇の前面に接近して舞臺が蓮池の上に造り出されて居る。舞臺の周圍は朱塗の勾欄を繞らし、床の上には綠地に赤の花文を現はした敷物を敷き詰め、その上に四人の菩薩が立つて優しく舞つて居る。(卷頭圖) 何れも上體は殆んど裸體で、天衣をまとひ、身邊には、金色の瓔珞を長く垂れ、兩脚には色の配合美はしき表袴おもてはかまを穿き、片足を軽く後にあげ、體を或は右に或は左に傾け、腕を上にあげ或は左右に伸べ、支體のこなし方如何にもなごやかに、中心をはづさず、立ち



舞ふ姿は誠に胡蝶も及ばぬ巧妙を極め、その轉廻旋律の美は、この畫にして始めてよく描き出せるかと思はれる程である。舞臺の左右兩側からは、左右の翼樓へ朱塗の反橋が架せられ、その橋上には伽陵頻伽が胡蝶の如く舞つて居る。左右翼樓の室内には何れも二人の菩薩が坐して樂を奏し、兩樓の屋外前面には四人の美装せる菩薩の一團があり、中央の舞踏に和して音樂を演奏して居る。この二團の菩薩は、龍頭鷁首の船に乗り、蓮池に浮んで居るのであるが、その龍頭鷁首の船は剝落して見えない。要するに此等の諸菩薩は淨土にあつて歡極まり、音樂舞踏を演じ旋律美を發揮して阿彌陀如來を供養して居るのである。

蓮池は淨土の前後左右をめぐり、須彌壇の左右兩側へも入り込み、所々に蓮華の花が開いて居る。鳳凰堂の蓮池も前面左右及び後方を繞つてゐたもので、今尙その形跡が認められ、この圖によく似て居るのである。

虚空段は中殿の上空に現はれた現象を描いたもので、金色の蓮瓣が降下し、その中を天人及び樂器が飛行し、天人は緋の裳裾を長く引いて華皿を捧げて居る。當麻曼荼羅虚空段の複雑な圖を最も單純化して居るのである。

## 二 修法儀式の圖

修法儀式の圖は極樂淨土の下方に描かれ、極樂淨土の圖と極めて重要な關係を持つて居るが剝落して不明な部分が多い。然し殘存せる部分によつては、構圖の性質だけは知ることが出来る。

圖の前面に朱塗の反橋があり、その橋際には二臺の牛車と侍者が控へて居る。この橋を渡ると鳳輦の如き車が三臺、無蓋の牛車が三臺ある。その附近には水干を着けた侍者、甲冑を着けた多くの武士が、高き屏の外側を警護して居る。この高屏は長く延びて所々に樓門を開き、樓門の前には武裝の武士が警護して居る。屏の内側にも鉾を持った武士が整列して警護して居ると見え多くの鉾先が屏越しに見られる。この屏の内部は更に内屏をめぐらし、その内屏にも所々に樓門がある。向つて右の方の外屏の樓門外には多くの車が置かれ、こゝから直ちに内屏の樓門を通つて嚴かな行列が進行しつゝある。玉冠を戴いた人物が二人前後に多くの侍者を従へて内庭に進みつゝある。この行列の左手には、



玉幡をさゝげた多くの者が長く列を作つて居る。中庭の中央には宮殿があり、三尊佛を安置して居る。中尊は右手に說法印を結び、左右の菩薩は合掌し、更にその前方には一人の菩薩が華皿をさゝげ、他の一人が合掌して居る。前面階段の左右には寶樹があり、寶樹の間には前机がある。机の上には香爐、六器、水瓶などが置いてある。行列は寶樹の下まで進んで居る。佛前には朱塗の勾欄を繞らした長方形の舞臺がある。舞臺の上には鳥冠とりかぶとを戴いた伶人が四人左右に分かれ、互に片手を長く外にのべて靜かに舞ひ、舞臺の左右一段低き所には四五の伶人が樂を奏して居る。佛殿の向つて左側には文官らしき五六人の者が兩手を組んで袖に隠くし、首をたれ、打ち沈んだ顔をして居る。向つて右上の隅には丹塗の樓門があり、その外には海水が描かれて居る。(第一八二九圖)

此等の殘存せる圖柄によつて考へると、この圖は或高貴な方の葬儀或は冥福を祈るために宮中或は平等院内に於て行はれた修法儀式であらうと想像されるが、殘存せる部分には僧侶の姿が見當らない。

これを要するにこゝに描かれた極樂淨土の圖は鳳凰堂それ自體を描けるも

の、如く、而して又その修法儀式の圖は或重要な修法儀式を寫せるもの、如く考察される。即ち鳳凰堂を本堂とした平等院は、極樂往生者の至るべき美はしき憧れの國を表象せるもので、藤原時代貴族の精神生活に統一と調和を與へた最も重要な往生思想の具體化であつたことを示して居るのである。



## 第六章 結論

四二

### 一 聖衆の俱會と往生觀

阿彌陀佛の淨土變相圖には阿彌陀佛を中尊として觀音勢至兩菩薩の外に多くの供養菩薩が描かれて居るが、その供養菩薩は即ち彌陀の絶對的慈悲によつて往生せる信者を表象して居るのであるから、それは要するに死後に於ける聖衆俱會を表象せるものと云ふことが出来る。

さて阿彌陀佛の安置されて居る寺院は、僧侶及び信徒が來集して阿彌陀佛を主尊とし、現實の社會に於て彌陀の說法を開く所の會座である。かくして寺院は彌陀の一大靈威を現はし現實的社會の感化に用ゐられたのである。阿彌陀佛を安置し、その淨土の圖をかゝげた寺塔の社會的價値を生ずる所以は、即ちこの精神的大團結にあるのである。

この鳳凰堂の如きは即ち藤原時代に於ける聖衆俱會の遺跡である。この御堂で催された阿彌陀佛說法の會座はあらゆる自然美と藝術美を通して現はされた宗教的觀念を背景として阿彌陀佛と僧侶の下に衆生が未來の極樂往生を仰ぎ望みつゝ、現世に於ける自己の幸福と一切衆生の平等的利益を合せもとめた精神的團結であつた。而してその集ひが如何に美はしく行はれたかは今尙残つて居る鳳凰堂そのものが雄辯に物語つて居るのである。

さてこの美はしき鳳凰堂に集ひ彌陀の淨土を讚仰しつゝ、あつた人々の心には誠に惠心僧都の來迎和讃に歌はれたやうな理想の輝きがあつたことであらう。よつてこゝにその和讃を讀誦して當時の理想を彷彿せしめたい。

### 來迎和讃

惠心僧都撰

攝取不捨の光明は

念ずる處を照すなり

觀音勢至の來迎は

聲を尋ねて迎ふなり

娑婆界をば厭ふべし

厭はば苦海を度らなむ



安養界を欣ぶべし  
草の菴の靜にて  
夕の嵐音無くて  
臨命終の時至り  
頭を傾け手を合せ  
聞ば西方界の空  
見れば緑の山の端に  
是の時身心安くして  
毫光我身を照しつゝ  
光雲漸く近付きて  
相好圓滿し給ひて  
烏瑟高く顯れて  
白毫右に旋りて  
管絃歌舞の菩薩は

願はば淨土に生るべし  
八功德池に心澄む  
七重行樹に度るなり  
正念違はずして西に向ふ  
彌よ淨土を欣求せむ  
伎樂歌詠ほのかなり  
光雲遙に輝けり  
念佛三昧現前し  
無始の罪障消滅す  
瞻仰すれば彌陀如來  
金山王の如くなり  
晴の空に綠なり  
眉の間に輝けり  
雲に袖を翻へし

持幡供華の莊嚴は  
觀音勢至諸薩埵  
各々威徳顯れて  
眼に滿てる慈悲の色  
耳に聞ゆる法の聲  
即ち紫雲變變て  
恆沙の衆會諸共に  
菴の上には諸化佛  
苔の庭には諸聖衆  
伎樂菩薩も是の時に  
絲竹の調べ雲を分け  
時に大悲觀世音  
紫摩金の軀を曲げて  
次に勢至大薩埵

風にまかせて亂れたり  
光の中に充ち滿てり  
聲々行者を讚め給ふ  
落る涙も止まらず  
歡喜の心幾ぞ  
柴のとぼそにたちめぐり  
前後左右に下り給ふ  
星を連ねて影向し  
光を竝べて長跪せり  
踊躍歡喜安からず  
徘徊牀地を照す  
漸く歩み近づきて  
蓮臺傾け寄せ給ふ  
聖衆同時に讚歎し



大乘智慧の手を伸べて 行者の頭を摩で給ふ  
 終に引接し給ひて 金蓮臺に乗せ給ふ  
 輪廻生死の舊里 是の時永く隔たりぬ  
 即ち金蓮臺に乗り 佛の後に隨ひて  
 須臾の間を経る程に 安養淨土に往生す  
 昔は大悲の利益を 僅に傳へ聞しかど  
 今は彌陀の引接を 心の末々に蒙れり  
 然るに彌陀の淨土は 快樂不退の所にて  
 壽命も無量に長ければ 樂盡る事ぞ無き  
 三十二相具はりて 莊嚴端正殊妙なり  
 六通三明悟り得て 心の如く自在なり  
 上は有頂の雲の上 下は無間の底までも  
 苦界の群類悉く 利益普く施せり  
 願くば彌陀觀世音 行者の誓を愍念し

大悲誓願誤らず 來迎引接垂れ給へ  
 願くは此の功德を 普く衆生に施して  
 同じく心を發しつゝ、 安養國に往生せむ  
 上來功德 回施法界 自他平等 滅罪生善  
 臨命終時 面見彼佛 共生極樂 速證菩提

(惠心僧都全集第三)

この和讃は今尙天台宗に傳ふる所でその歌旨は鳳凰堂の周圍をめぐる風光、その繪畫彫刻及び莊嚴美によつて表象された阿彌陀佛の來迎觀即ち往生觀と誠によく調和して居るのである。要するに鳳凰堂に於ける聖衆の俱會は造形藝術と音律的藝術のうちに當時の往生觀を美はしく表象したものであつてこの和讃は即ちその心とその美を歌つてゐるのである。

### 二 鳳凰堂に表象されたる淨土觀の總括的批判

鳳凰堂は藤原賴通の淨土觀を表象して居るが、その淨土觀は、彼獨持のもので



はなく、彼の時代に於ける貴族一般の浄土觀を代表して居るのである。さて鳳凰堂の各部を研究して最も著しく感ぜられることはそのすべてが現實的美觀を遺憾なく發揮して居ることである。

鳳凰堂の構造は、貴族の住宅たる寢殿造より出で、外觀に和平諧調の美を備へ、内部の裝飾は當時に於ける裝飾美の極致を現はし、中尊阿彌陀像の周圍には現實的美裝が凝らされて居る。堂内四周の長押上にかゝれる雲中供養菩薩の群像は、その姿態婉麗にしてそこに厭世的何物もなく、現實的舞踊の律動美を以て阿彌陀如來を讚美して居る。それのみではなく、修法禮拜などある時は、貴族の大饗宴と同様に歌舞音樂が行はれた。その舞臺は臨時に設けられ、池上には龍頭鑄首の船が浮べられたのである。扶桑略記治曆三年十月五日の條に天皇宇治平等院に行幸阿彌陀堂を禮拜し給へることを記載せる中に「池上架飾繡假屋又池中有龍頭鑄首奏童樂訖」云々とある。その状は恰も須彌壇の後壁に描かれた極樂浄土の圖に見る如きものであつたであらう。

今此等の點を綜合して最後に考ふべき問題は、こゝに現はされた現實的美の

世界と浄土思想との關係である。この關係は現實と理想との關係である。更に言ひ換ると現實的理想と死後の世界との關係である。未來は現實の延長で生は死に至り、死は蘇生する。未來と現實は無形と有形の相違で未來は現代ありて始めて考へられる問題である。即ち鳳凰堂に表象された浄土觀も現實的經驗によつて想像された理想の世界であると共に來世觀でもある。これを反對に云へば理想の現實化である。

現實と理想の關係は獨り鳳凰堂にのみ見る現象ではない。法隆寺の伽藍制度の如きも宮城制度と互に酷似せることは伊東博士の法隆寺建築論中にも既に論せられた所であるのみならず一般佛寺建築の基礎が世俗的建築にあるは當然のこと、云はざるを得ない。尙この傾向は何れの宗教にも認められることである。神社建築に於ても出雲大社のプランは我が太古の住宅プランをそのまゝ傳へたものであることは一般建築史家の承認する所である。また伊勢神宮の神明造も當時皇居の様式によつたものと認められて居る。キリスト教會堂の最も古い様式は、ローマのバシリカ Basilica の構造によつたもので、その



後實用上から左右に袖 *Transepts* を加へて十字架形のプランを有するキリスト教會堂 *Circiform church* が出來上り、それが一般的の様式となり、十字架上のキリストを聯想せしむべき深甚な表象的意義が附加されるやうになつた。然しその様式の起原がローマの住宅建築にあつたことは勿論である。

神社建築にしても、またキリスト教の會堂にしても、その現實の形態が理想化されるためには神佛或はキリストの力によつて社會生活が統一されなければならぬ。理想化の樞機はこの點に存して他の何れにも存しない。さてその理想化の運行には各宗教それ／＼異なる徑路をとつて居るが、その神殿を俗界から分離して現實を理想化せんとする努力は何れの宗教にも認められる共通點である。これを鳳凰堂に就て考へるに、賴通がその別業を捨て、寺としたのは、無形的には自己の力を棄て、阿彌陀如來の力を迎へたことである。即ち平等院を俗界から分離して彌陀の住み給ふ神聖な所としたのである。而してその別天地にあらゆる現實的美觀を入れ、それが金色の阿彌陀如來によつて淨化されたのである。故にそれは賴通の往生觀と關聯せる淨土觀を具體化したもので、

現實的世相の理想化である。その救世の力は現實美の理想化にして鳳凰堂の宗教的價値をなすものは即ちこの理想化であつた。

(1) 日本神社建築の發達—伊東忠太—建築雜誌一六九號。  
 (2) 同上。



圖版解説

卷頭圖 須彌壇後壁淨土圖の模寫 明治二十八年東京帝國大學建築學教室模寫

第一圖 鳳凰堂正立面圖 東京帝國大學建築學教室所藏

第二圖 鳳凰堂橫斷面圖 東京帝國大學建築學教室所藏

第三圖 鳳凰堂平面圖 東京帝國大學建築學教室所藏

第四圖 鳳凰堂全景 其一

中堂、兩翼及後尾より成る。中堂三間二面裳階あり、屋根入母屋、總本瓦葺、天喜元年  
(西曆一〇五三)藤原賴通創建

第五圖 鳳凰堂全景 其二

第六圖 鳳凰堂屋上の鳳凰

青銅製、藤原時代、高三尺二寸餘、重量十六貫

第七圖 鳳凰堂本尊阿彌陀像

寄木造漆箔、藤原時代、傳定朝作、高九尺七寸、結跏趺坐の像で正覺印(彌陀の定印)を結ぶ。

第八圖 鳳凰堂本尊の天蓋

木製漆箔、藤原時代、方形にして周圍に垂飾を有し中央に圓蓋をつるして居る。天井は格天



井で框には螺鈿を嵌入し格内所々に圓鏡を嵌装して居る。

第九圖 鳳凰堂本尊胎内の甘露呪及其の臺座

悉曇墨書、藤原時代、極彩色の華麗な蓮座に取り付けられた木製の圓盤に書かれて居る。

東京帝國大學建築學教室藏模寫圖に據る

第一〇圖 雲中供養菩薩群像

木造、藤原時代、中殿内部の四周長押上の小壁にかゝげられて居る。その數五十二軀。もとは彩色されてあつたが今は剝落して見えない。

第一一圖 雲中供養菩薩群像の一

木造、藤原時代、菩薩の舞踊せる様を現はす。

第一二圖 扉繪上品中生觀の圖

藤原時代、中堂の正面向つて右脇の柱間の扉にあり、板面に先づ胡粉地を作りその上に描き彩色を施して居る。山峽から彌陀と諸菩薩が浮雲に駕して來迎し、阿彌陀如來は結跏趺坐の像で、その光明は下方に描かれた行者の家に達して居る。

第一三圖 壁畫中品中生觀の圖

藤原時代、中堂の内部左側の壁面に描かれて居る。迎來の阿彌陀佛及諸菩薩を現はす。

第一四圖 壁畫中品中生觀の觀音菩薩像

姿態婉麗優美にして藤原時代の代表的美人の相貌を現はして居る。

第一五圖 扉繪下品上生觀の圖の一部

藤原時代、右側の扉に描かれ、來迎の阿彌陀佛に侍し、樂を奏し或は合掌せる菩薩を現はす。

第一六圖 扉繪下品中生觀の圖

藤原時代、右側の壁面にあり、手法右側の壁畫と同様、來迎の阿彌陀佛及諸菩薩を現はす。

第一七圖 須彌壇後壁の淨土圖

藤原時代、他の壁畫と異り板面に直接胡粉地を作りその上に描いて彩色を施して居る。その圖は鳳凰堂を縮寫せる如き觀がある。

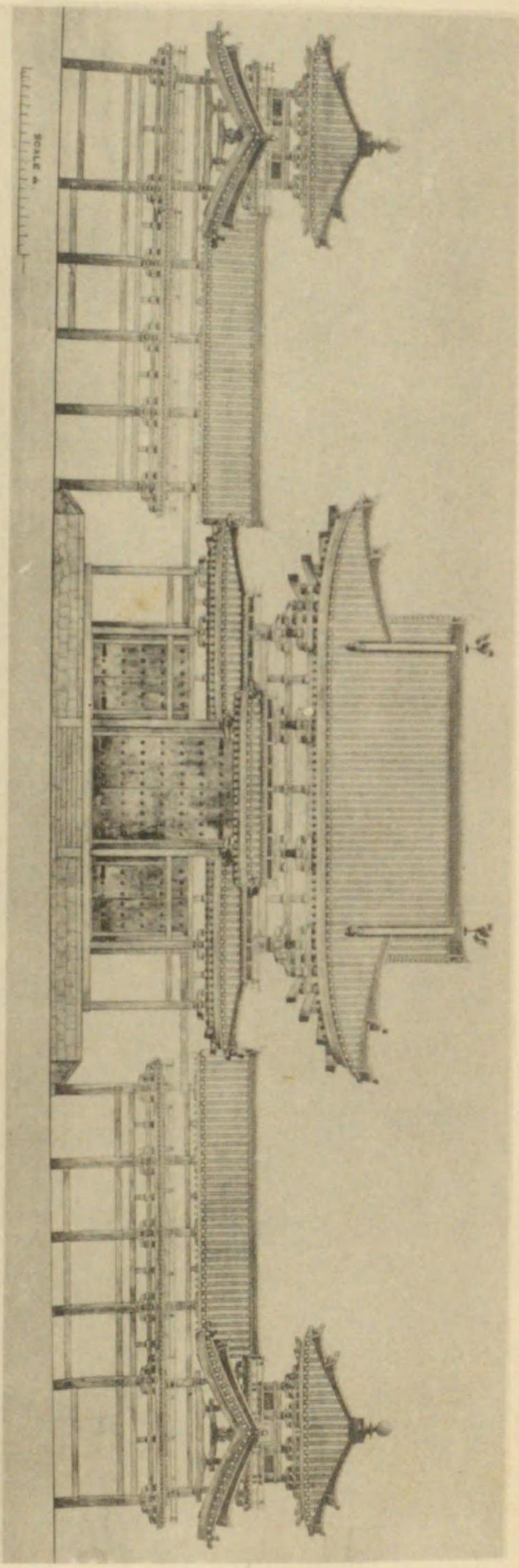
第一八圖 須彌壇後壁修法儀式の圖 其一

藤原時代、手法第一七圖に同じ。

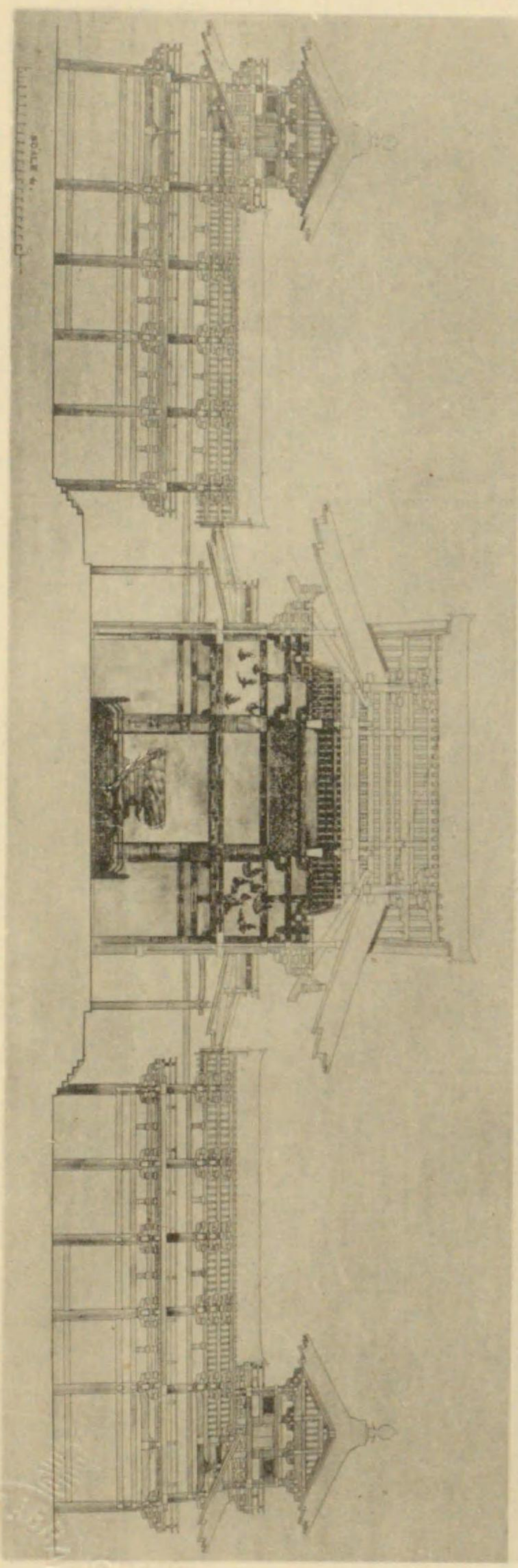
第一九圖 須彌壇後壁修法儀式の圖 其二

藤原時代、手法第一七に圖に同じ。





鳳凰堂正圖 第一圖

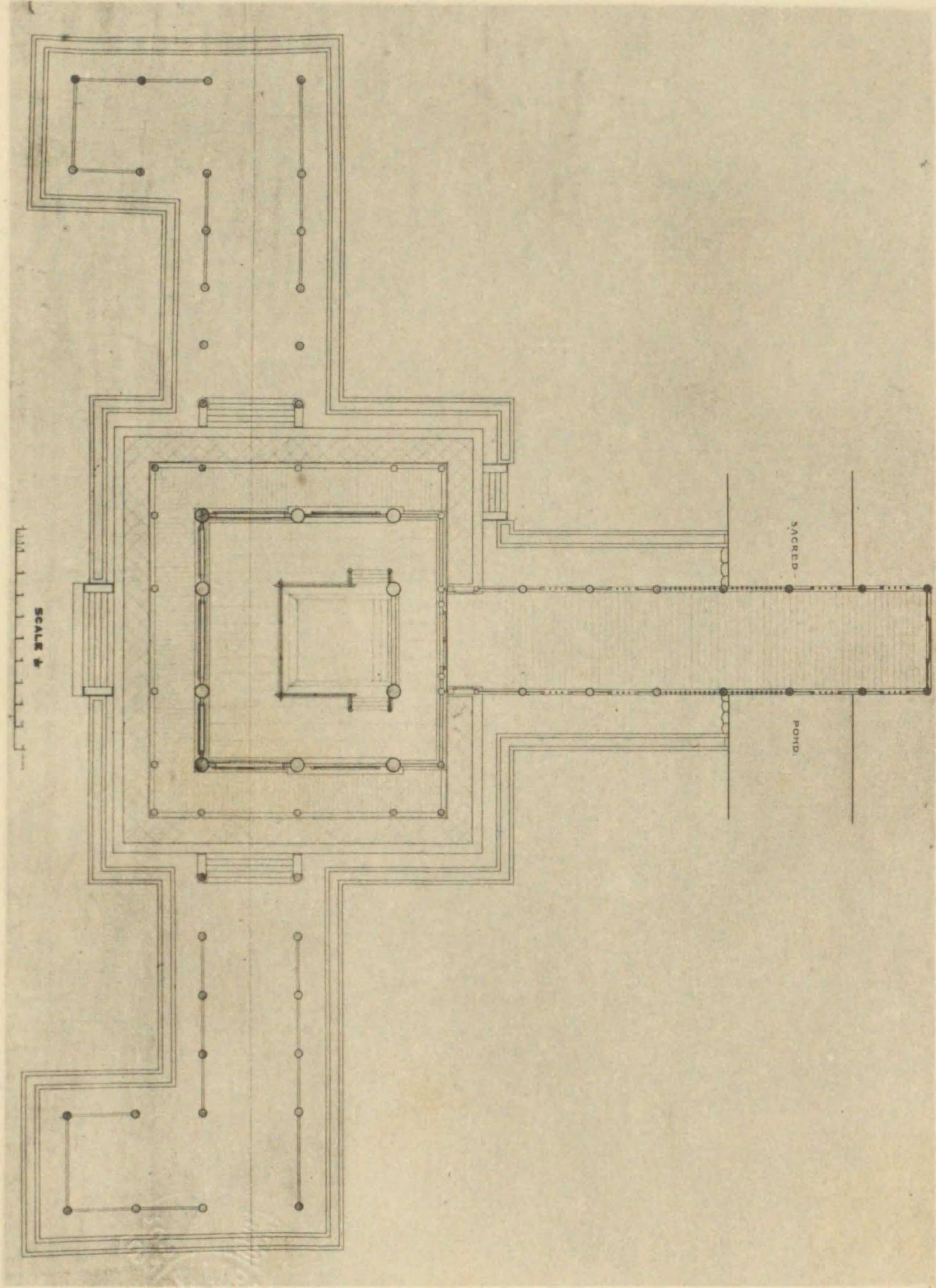


鳳凰堂橫斷面圖 第二圖





第三圖



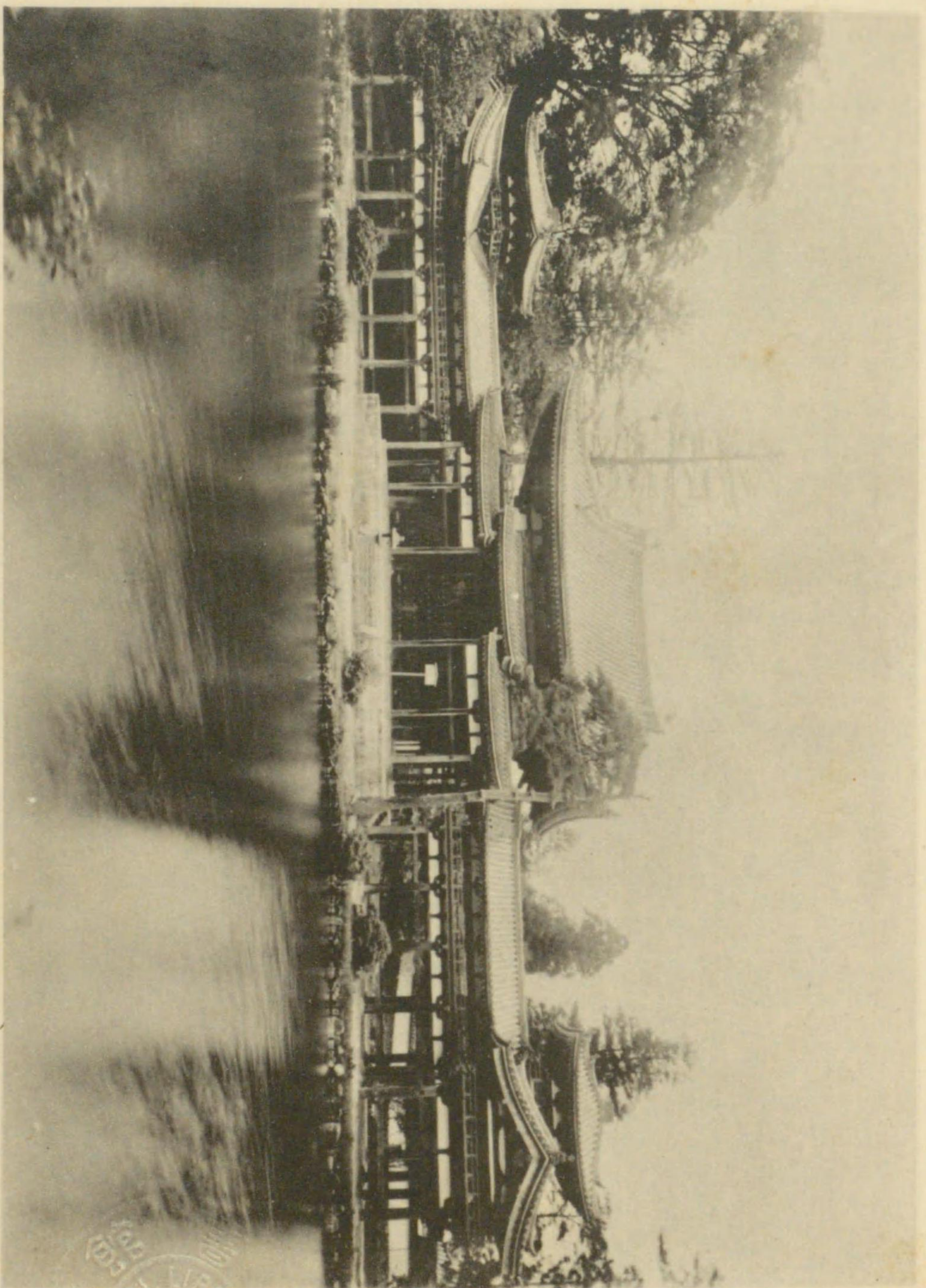
鳳凰堂平面圖

60





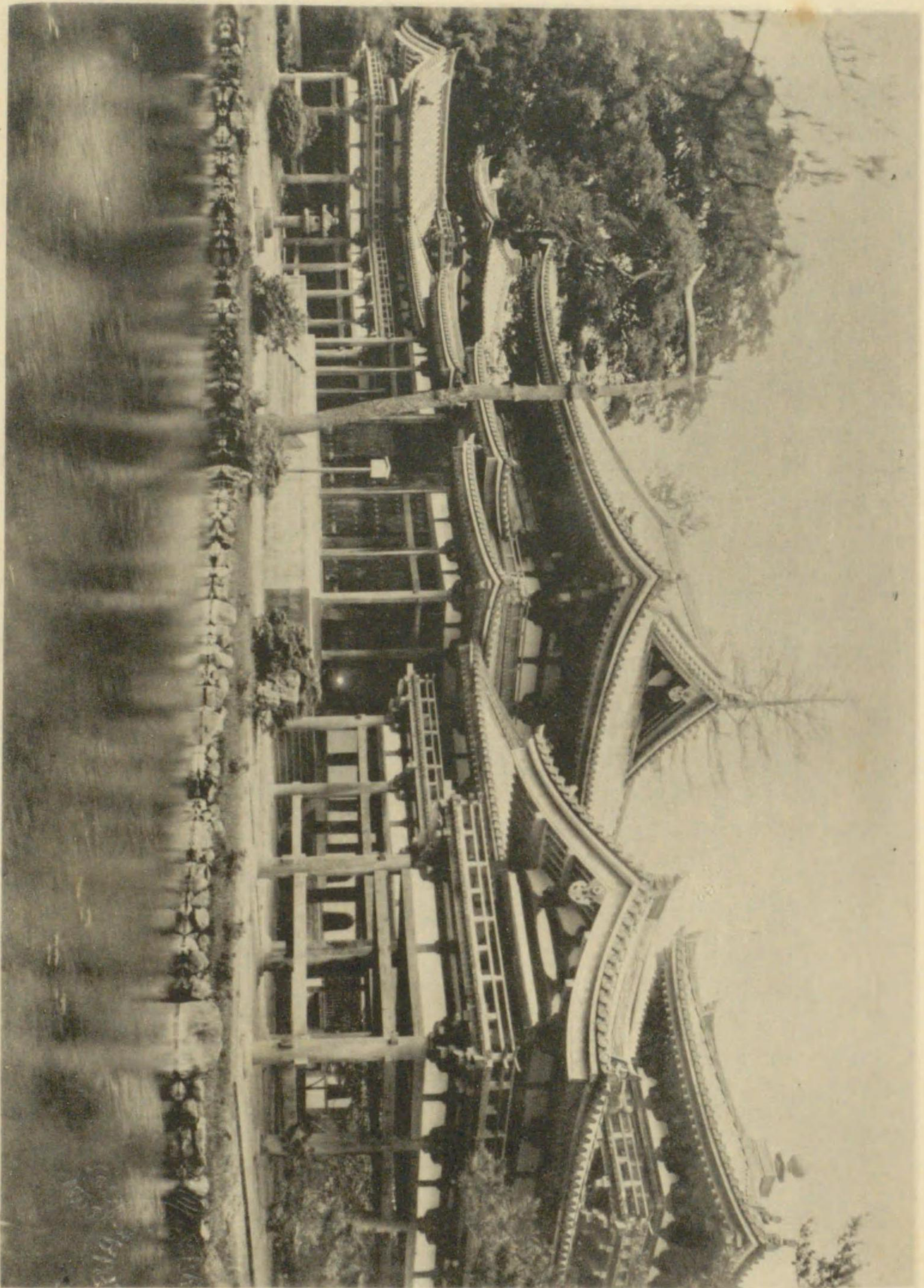
60



一 共 泉 堂 鳳 凰

第 四 圖





二 共 泉 全 堂 鳳 凰

第 五 圖

60







鳳凰の上屋堂鳳凰

60





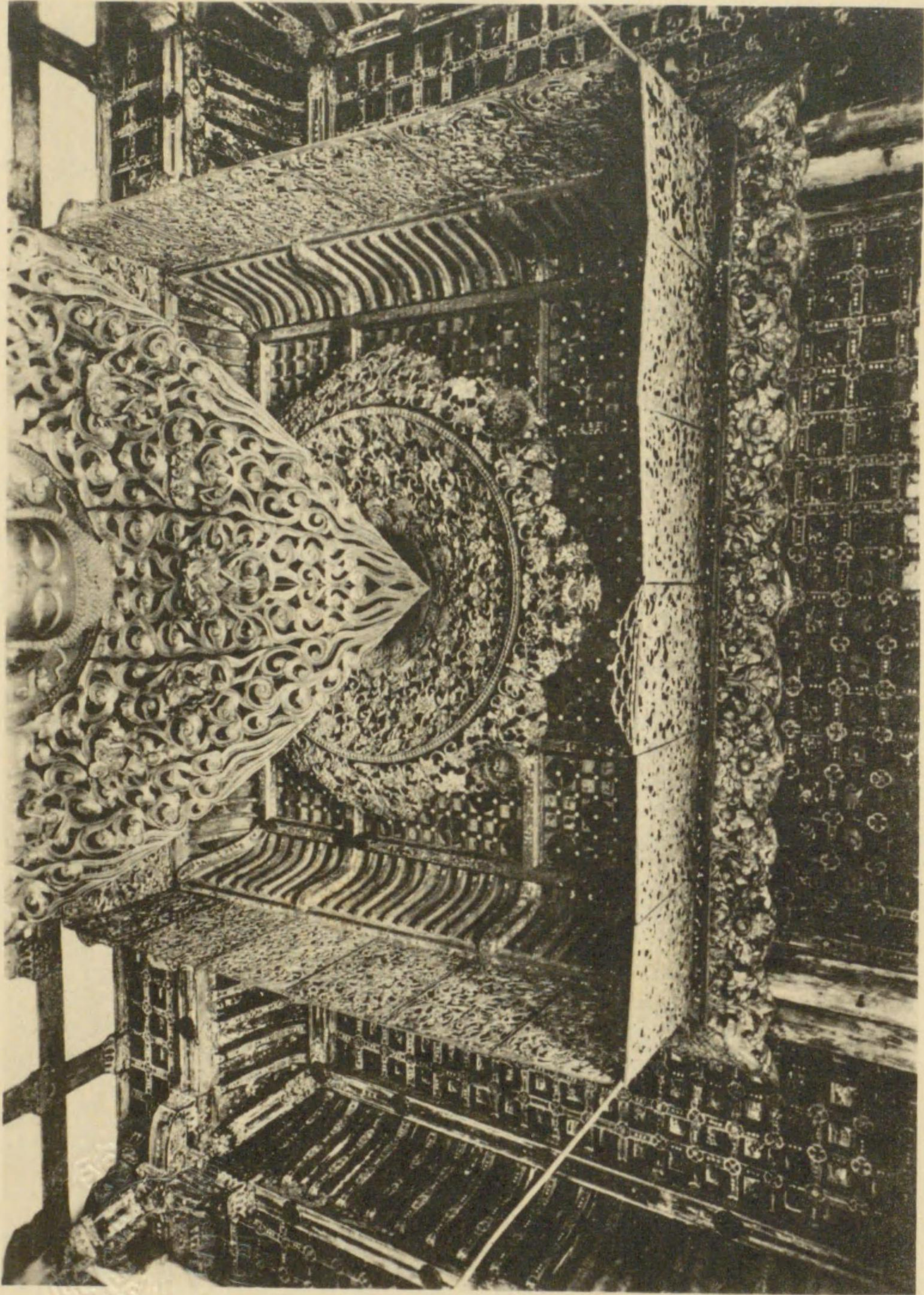
鳳凰堂本尊阿彌陀像

160





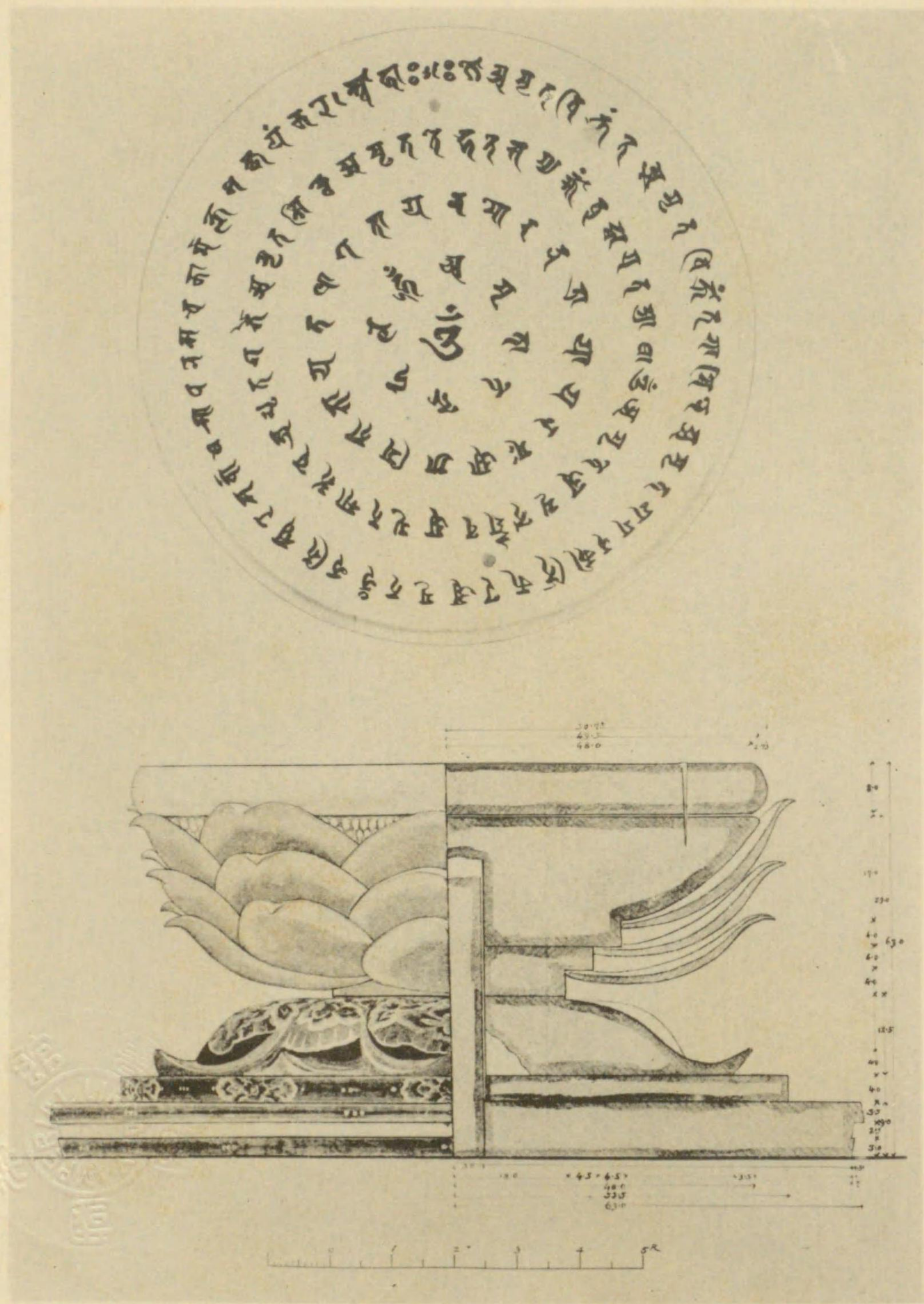
鳳凰堂本尊の天蓋



160



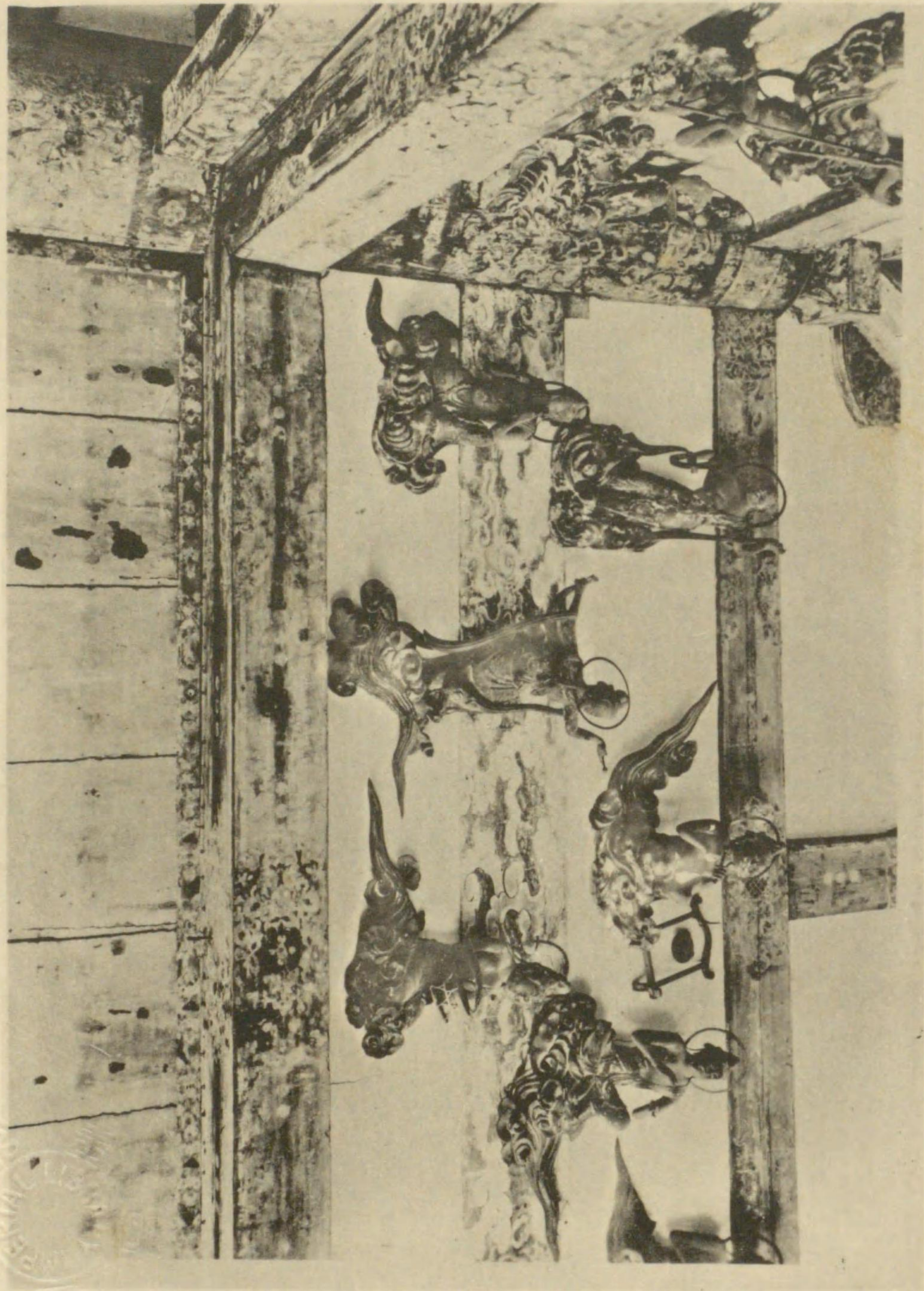




座臺のそ及咒露甘の内胎尊本堂鳳凰



像群隨菩薩供中雲



360

THE UNIVERSITY OF CHICAGO  
ASIAN LIBRARY





雲中供養菩薩群像の一

360







屏繪上品中生觀の圖

360





第 一 三 圖

第 一 三 圖



壁 畫 中 品 中 生 觀 之 圖

560







薩菩音觀の觀生中品中畫壁

560



第一五圖



部一の圖の觀生上品下繪屏

560





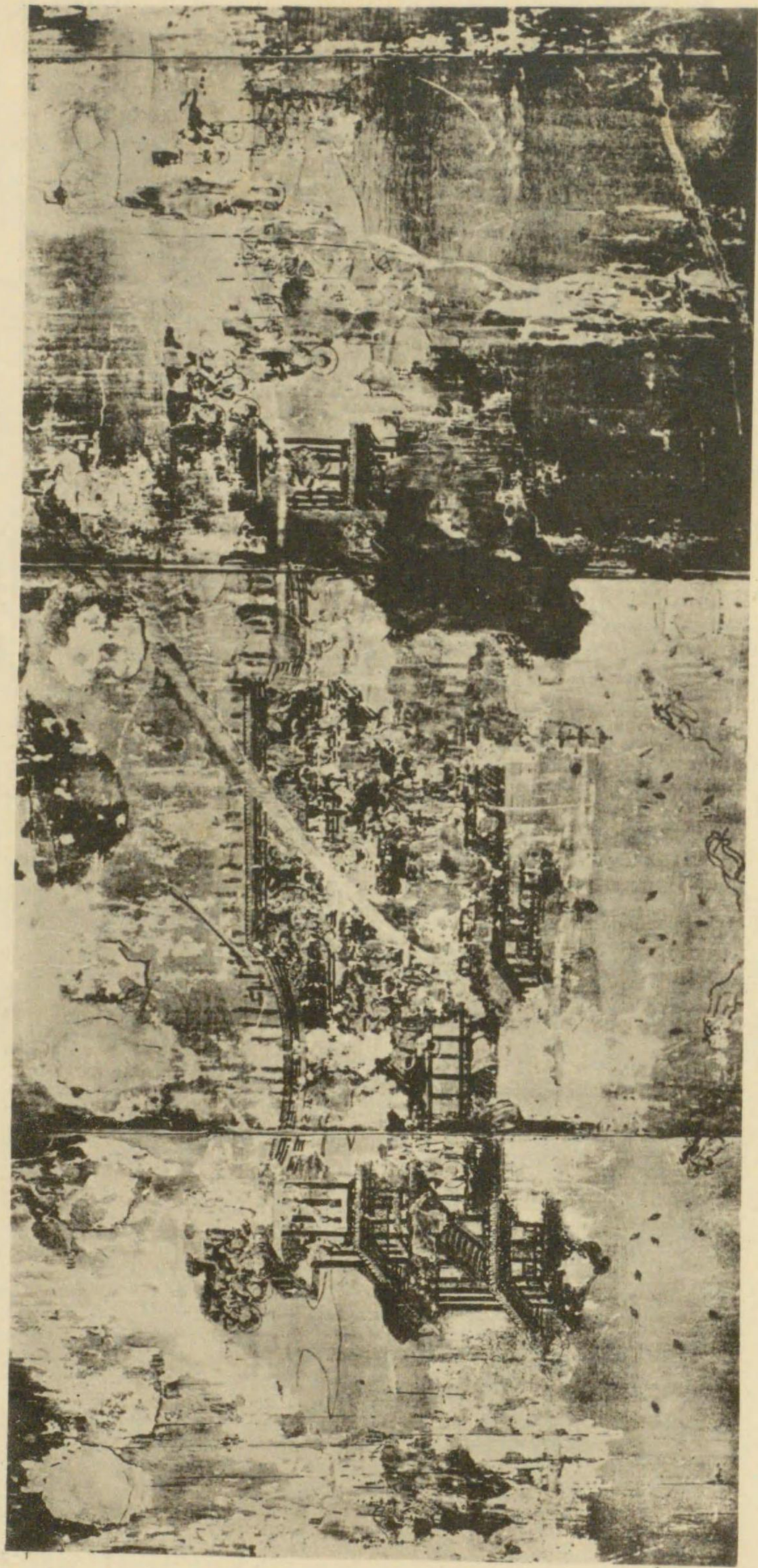


壁畫下品中生觀圖

560



560



須彌壇後淨土園圖

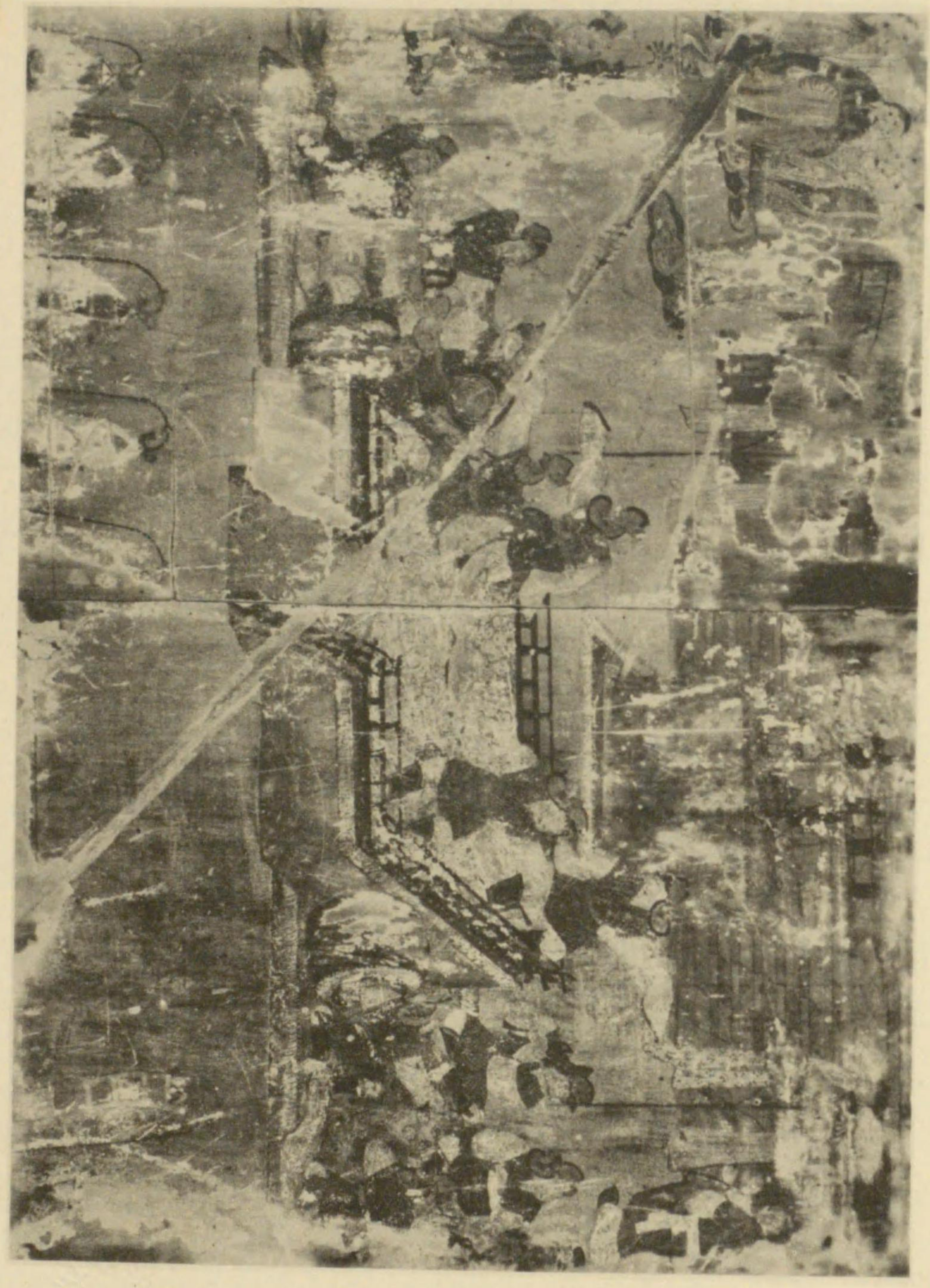
第一七圖

560



第一八圖

須彌壇修築法之式圖一



550



第一九圖



二其 圖の式儀法修の壁後壇彌須



昭和五年八月五日印刷  
昭和五年八月廿日發行

鳳凰堂の研究叢刊  
定價壹圓八十錢



版權所有

著者 東京市外田端一五番地 津田敬武

發行者 東京市神田區北甲賀町四番地 岡茂雄

印刷所 東京市神田區錦町三丁目十七番地 精興社

發兌 東京市神田區北甲賀町四  
岡書院

電話神田二七七五番  
振替東京六七六一九番





58  
2

I/2W68







岡書院版